

## 二言語併用者における語彙レベルの干渉現象

## －フランス在住コモロ移民一世の事例－

## Cross-Linguistic Interference in Bilinguals: a Case of Comorian Immigrants in France

小田淳一

Jun'ichi ODA

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

Cross-linguistic interference is said to mutually occur at various levels in bilinguals between their first (L1) and second (L2) languages. The aim of this paper is to analyze various aspects of linguistic interference using informatics in the utterance of first-generation Comorian immigrants in France, whose first language is Comorian (Shingazija: the Ngazidjan dialect) and second language is French, to show how the French words are used in Comorian utterance.

## 1. はじめに

言語学における「干渉」とは、「二言語併用の話者が目標言語 A の中で、もうひとつの B 言語に特有の音声、形態、語彙、統辞上の特徴を使用すること」であり、またその使用は「個人的かつ無意志的」とであるとされている[デュボワ他 1980]。本報告は、フランス在住のコモロ移民一世が L1 のコモロ語で語った発話内で確認された干渉現象(L2 のフランス語の使用)を幾つかの観点から分析することを目的とする。

## 2. データの採取

## 2.1 発話者

## (1) M 氏

データ採取時(2012年2月)75歳。パリ東部郊外モントルリュ在住でフランス滞在期間約40年。フランスからコモロ連合が独立した1975年にモントルリュへの最初の移民団の一員として移住した。

## (2) A 氏

データ採取時(2012年2月)73歳。パリ南部郊外ヴァイトリー＝シュル＝セヌ在住でフランス滞在期間約10年。ンガジジャ島(グランド・コモロ島)の首都モロニでアラビア語とクルアーンを40年間教えていた。

## 2.2 発話状況

## (1) 使用言語

「コモロ語」(出身地のンガジジャ島方言)で語るように依頼。

## (2) 発話の内容

発話者自身のライフヒストリーを語るように依頼したが、コモロの文化全般や自分の一族の歴史、また様々な事物に対する個人的見解など多岐に亘っている。

## (3) 付記事項

M 氏は早口で、A 氏はゆったりとした語り口で、二人とも休み

なしで約90分間語り続けた<sup>1</sup>。また、A 氏の発話には干渉が殆ど確認できなかったことから<sup>2</sup>、本報告で取り扱うデータは M 氏の発話についてのみである。

## 3. 観察された干渉

M 氏の発話における干渉(コモロ語の中で、フランス語に特有の諸特徴を使用すること)のうち、最も捉え易いのはフランス語の語(ひとつ、或いはひと続きの複数の語)が出現した時であり、本報告はそれらを分析対象とし、統辞レベルは扱わない。

## 3.1 分析データ

コモロ語(L2)へのフランス語(L2)の干渉として現れた語(群)の数は次の通りである。

- 述べ語数:249語(群)
- 異なり語数:119語(群)

この結果は、L1の発話において、L2の119語(群)が「個人的かつ無意志的」に使用されたことを示しているが、それらの語(群)の分析に際しては幾つかのレベルを設定することが考えられる。まず、特定の文脈における干渉は、意味を担う語彙的形態素(語彙素)と関わることから、語彙素とそれ以外の文法的形態素、即ち、相対的な自立性しか有しない機能語等の類に分けることとなるが、今回採取したデータには文法的形態素は数語しかなかった。その理由のひとつは、それらが多ければ、統辞レベルで結びつく「自立語」がL2とL1のどちらになるかを選択することとなり、「無意志的」な使用ではなくなるからであろう。次いで、発話者が日常的に使い慣れているフランス語の慣用表現が使用されている場合には、一般的なフランス語発話における語彙の頻度と関わってくる。さらにまた、使用された語(群)が有する音の次元の特徴に関わる可能性もある。

## (1) 語彙的形態素

干渉によって出現した、文法的形態素や副詞、助動詞などを除く語彙的形態素73語(群)とそれらの頻度は次の通りである<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> コモロには昔から、住民たちが自由に議論を行う「公共の場 bangwe」があり、成人男性の多くは話術に長けている。

<sup>2</sup> A 氏はフランスに移住して約10年と比較的日がまだ浅く、またイスラームの教師であったことから、社会生活において一般のフランス人と余り関わっていないことがその理由と考えられる。

<sup>3</sup> 和訳は文脈に対応した語義を選択した。

表 1: 干渉によって出現した語彙的形態素と頻度

語(群)	頻度	和訳	語(群)	頻度	和訳
président	11	大統領	enregistrer	1	登録する
installer	4	身を落ち着ける	épuiser	1	使い尽くす
anglais	2	英語/英国の	esclave	1	奴隷
autonomie	2	自治	facilité	1	容易さ
catholique	2	カトリック	gauche	1	左派
condition	2	条件	groupe	1	グループ
demander	2	頼む	habiter	1	慣れている
démocratique	2	民主主義の	histoire	1	歴史
député	2	代議士	historien	1	歴史家
équipe	2	チーム	informatique	1	情報処理
maudit	2	呪われた	informer	1	報せる
politique	2	政治	intéressé	1	関心がある
préparer	2	準備する	isolé	1	孤立した
stabiliser	2	安定させる	juif	1	ユダヤ人
téléphone	2	電話	manifestation	1	デモ
accident	1	事故	métier	1	職業
ambassade	1	大使館	montrer	1	示す
bureau	1	事務所	partir	1	出発する
charpentier	1	大工	place	1	場所
chef d'équipe	1	班長	policier	1	警察官
chrétien	1	キリスト教徒	portugais	1	ポルトガルの
colonie	1	植民地	premier ministre	1	首相
combattre	1	闘う	proposer	1	提示する
commissariat	1	警察署	radio	1	ラジオ
complètement fou	1	全くの馬鹿	répondre	1	答える
compromis	1	仲裁	résidence	1	居住(地)
conseil	1	助言/会議	rester	1	留まる
contact	1	接触	royal	1	王の
contacter	1	接触する	Sud Afrique	1	南アフリカ
conte	1	物語	système	1	システム
danger	1	危険	témoignage	1	証言
débiter	1	供給する	tourner	1	向かう
définition	1	定義	travaux	1	仕事
disparaître	1	消える	Turquie	1	トルコ
dommage	1	残念な	visite	1	訪問
droite	1	右(翼)の	voyage	1	旅行
droitier	1	右派			

これらの語(群)は、語彙レベルの干渉が取り分け「個人的」であることを示している。つまり、語られたライフストーリーで主たるテーマとなる「移住」に関わる語や、コモロ人男性が特に政治談義を好むという傾向が表れていると言えよう。

(2) 一般的な発話内の頻度

表 2 は採取された発話における、意味を担わない文法的形態素なども含むすべての語(群)の頻度順(2 以上)一覧である。

表 2: 干渉によって出現した頻度 2 以上の語(群)

語(群)	頻度	和訳	語(群)	頻度	和訳
parce que	70	何故なら	anglais	2	英語/英国の
président	11	大統領	autonomie	2	自治
bon	10	良い	catholique	2	カトリック
c'est-à-dire	8	即ち	condition	2	条件
comme ça	5	こんな	demander	2	頼む
installer	4	身を落ち着ける	démocratique	2	民主主義の
jusqu'à	4	~まで	député	2	代議士
mais	4	しかし	équipe	2	チーム
vraiment	4	本当に	maudit	2	呪われた
c'est vrai	3	その通り	non	2	いいえ
oui	3	はい	politique	2	政治
toujours	3	いつも	préparer	2	準備する
voilà	3	ほら	stabiliser	2	安定させる
			téléphone	2	電話

L1 における L2 の干渉では、L2 で日常的によく用いられる語(群)が出現し易いことは当然である。表 3 は、表 2 の語(群)について、膨大なコーパスから作成されたフランス語彙データ Lexique3.80<sup>4</sup>におけるそれぞれの頻度を抽出したものである。

表 3: 干渉による出現語の Lexique3.80 における頻度

lemme	freqlemfilms	freqlemlivres	freqfilms	freqlivres
ça	8933.66	2477.64	8933.66	2477.64
mais	5179.05	4463.72	5179.05	4463.72
non	4040.18	1135.81	4040.18	1135.81
oui	3207.35	637.57	3207.35	637.57
comme	2326.08	3429.32	2326.08	3429.32
bon	1554.44	789.66	836.29	376.28
toujours	1072.36	1093.78	1072.36	1093.78
vraiment	968.57	274.32	968.57	274.32
demander	909.77	984.46	188.86	144.66
vrai	807.03	430.07	678.47	311.89
voilà	726.44	329.12	726.44	329.12
parce que	548.52	327.43	548.52	327.43
préparer	174.33	154.12	46.71	43.24
téléphone	160.80	96.82	155.68	93.99
président	143.39	79.66	131.53	76.22
équipe	129.97	34.32	118.00	26.28
installer	70.76	162.23	22.76	29.73
anglais	51.01	79.53	48.81	69.46
condition	46.73	91.62	25.61	45.81
politique	38.09	70.81	24.89	44.39
maudit	37.18	17.50	17.59	7.43
catholique	13.26	27.03	10.91	21.28
député	10.40	10.88	7.40	6.42
démocratique	5.38	5.74	4.97	4.12
stabiliser	4.84	1.42	1.65	0.61
autonomie	2.76	2.16	2.76	2.16
jusqu'à	0.81	0.27	0.81	0.27
c'est-à-dire	0.00	51.96	0.00	51.96

表 3 のそれぞれの値は、字幕コーパス<sup>5</sup>と書籍コーパス<sup>6</sup>に基づく 100 万語当たりの生起頻度であり、項目名末の'-films'が字幕コーパスを、'-livres'が書籍コーパスを示している。また、語頭の'freq'の後に続く'lem'は、当該語を見出し語形とするすべての屈折形を含む頻度である。尚、ここでは最初の項目である'freqlemfilms'の頻度降順に語を並べ替えている。

表 3 を表 2 と比較することによってまず明らかなのは、日常会話で頻繁に用いられる単音節の指示形容詞(ça)や、対立を表す接続詞(mais)、肯定/否定を表す副詞(oui/non)などが、表 3 の頻度上位に位置していることであり、さらに、それらを含む表 2 の約半分近くの語(群)について、表 3 では字幕コーパスの頻度(屈折語を含む頻度)の方が書籍コーパスのそれよりも高いことである。これは、日常会話の頻出表現が書籍コーパスよりも字幕コーパスで頻度が高いという自明のことを表している<sup>7</sup>。これに対し、ここで興味深いのは、合成語'c'est-à-dire'(即ち)が字幕コーパスでは殆ど出現せず(百万語当たり 0 回)、一方書籍コーパスでは相対的に高い頻度(百万語当たり約 52 回)であるにもかかわらず、M 氏がこの語を頻繁に(8 回)使用していることである。これは、M 氏が少なくともこの語義については文語的表現を使用したことを示しているが、その理由のひとつとして考えられるのは M 氏が L2 の習得の際に「書籍」を主に利用したことであり、干渉の個別性を表す一例であろう。事実、母語使用者の日常会話を構成する語が多く含まれている字幕コーパスには、

<sup>4</sup> <http://www.lexique.org/>

<sup>5</sup> 9474 本の映画の字幕(延べ 5000 万語)に基づいて作成されたコーパス。

<sup>6</sup> 1950 年から 2000 年の間に出版された 218 の文学テキスト(延べ 1470 万語)に基づいて作成されたコーパス。

<sup>7</sup> 'comme'の頻度が字幕コーパスよりも書籍コーパスで高いのは、当該語が他の語と共に起ることが多いためであると思われる。

'est-à-dire'の代替表現がより高い頻度で存在しており、「単語」ならば、より音節数の少ない語('soit'や'disons'など)がそれに該当し、さらに、フランス語には複数の語による慣用表現が多いことから、「est-à-dire」の複数語による代替表現('je veux dire', 'à savoir', 'autrement dit'など)<sup>8</sup>の「各語」についても、それらが字幕コーパスでは高い頻度に位置している。

### (3) 音の次元

干渉における L2 の語(群)の使用については、上述したように、個別的な文脈による特定の語彙素の使用や、L2 の発話における一般的な頻度に準ずる他に、音の次元での関与が存在する可能性もある<sup>9</sup>。本報告では、その関与性を検討する方法のひとつとして、使用された L2 の語の「語頭音」について、その音声学的特徴の分布を以下で検討する。

ここで「語頭音」を問題とするのは、恐らく今まで扱われることのなかった、干渉の「修辭的」研究を試みるための糸口としてであり、それは、L1 の発話内の L2 の使用である干渉が、発話内の偏差として生じるという意味において、それを一種の修辭現象として捉えることが可能であり、また典型的な修辭現象である俗語や隠語の形成における修辭的操作(形質変換)のひとつである語の「転置」が、しばしば無意志的な語頭音の使用と関わっているからである[小田 2007]。本報告で採取した L2 の語頭音の音声学的特徴の分布が、フランス語の一般的な頻度上位語の語頭音のそれと類似していれば、L2 の語の使用における一般的な頻度の優位性が或る程度は例証されることになり、干渉における音の関与性はほぼ認められないと言えるだろう。

図 1 は干渉によって出現した語の語頭子音について、それらの調音位置の分布を示したものであり、図 2 は字幕コーパスの頻度上位 1 万語の語頭子音の調音位置の分布である。

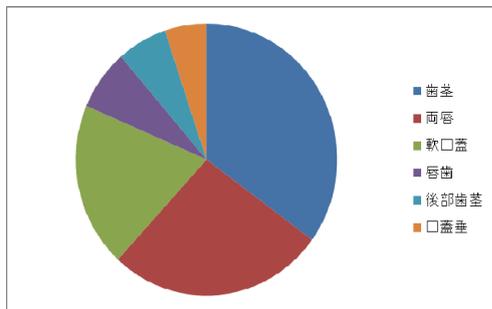


図 1: 語頭子音の調音位置 (L2)

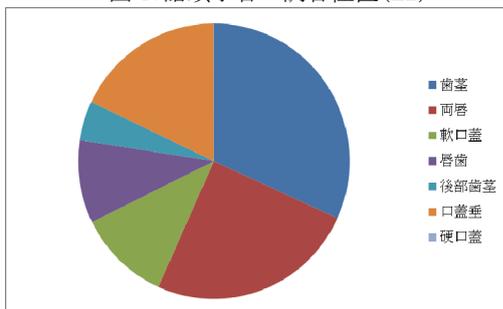


図 2: 語頭子音の調音位置 (字幕 Corpus 頻度上位 1 万語)

<sup>8</sup> 日本語表現ならば、「est-à-dire」(即ち)に対する、「à savoir」(つまり)や「autrement dit」(と言うか)等がそれに相当するだろう。

<sup>9</sup> 単純な例としては、前節でも言及したように、干渉による出現語のうち高頻度のものには音節数の少ない語が多く、無意志的なコストの最適化とも呼び得るだろう。表 3 における 28 語の音節数の分布は、1 音節が 7 語、2 音節が 7 語、3 音節が 11 語、4 音節が 3 語であり、3 音節以上の語は頻度下位に多い。

ここで最も顕著な分布の相違は口蓋垂音についてであり、字幕コーパスの方が、採取した L2 (フランス語)の使用よりもはるかにその割合が大きい。フランス語の子音で調音位置が口蓋垂にあるのは、有聲口蓋垂摩擦音[x]のみであるが、この音は一般に、フランス語の母語使用者以外には発音しにくいと言われ、またコモロ語でこの音に近いもの是有聲歯茎ふるえ音[r]であり、調音位置が口蓋垂よりも前方であることから、この音を語頭に持つフランス語の語が無意志的に回避された可能性がある。一方、軟口蓋音については逆に、L2 としてのフランス語の使用分布の方が、字幕コーパスにおけるそれよりも割合が大きい。これは、コモロ語の軟口蓋音の数が、フランス語本来の軟口蓋音の数(無聲軟口蓋破裂音[k]と有聲軟口蓋破裂音[g]の 2 種のみ)より多く、また語頭に位置することも多いため、コモロ語話者には発音が容易であることと関係しているとも考えられる。

次に、語頭子音の調音方法について、図 3 に干渉による L2、また図 4 に字幕コーパスの上位 1 万語の分布を示す。

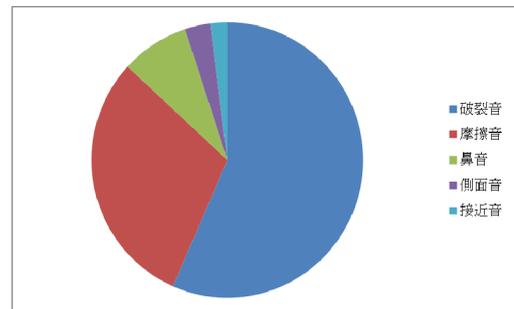


図 3: 語頭子音の調音方法 (L2)

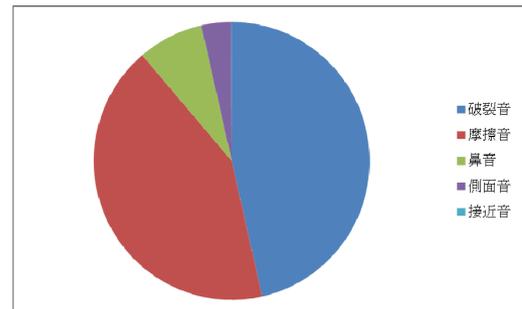


図 4: 語頭子音の調音方法 (字幕 Corpus 頻度上位 1 万語)

ここで明らかなのは、破裂音と摩擦音の 2 種で調音方法の殆どを占めていること、また、干渉による L2 における破裂音の割合が、字幕コーパスのそれよりも大きいということである。これは、破裂音と摩擦音を無聲/有聲別に分けた図 5 と図 6 からわかるように、L2 では有聲音における破裂音の割合が大きいことによるものであり、コモロ語が属するバントゥー諸語一般に見られるような破裂音システムの多様性が関与している可能性がある。

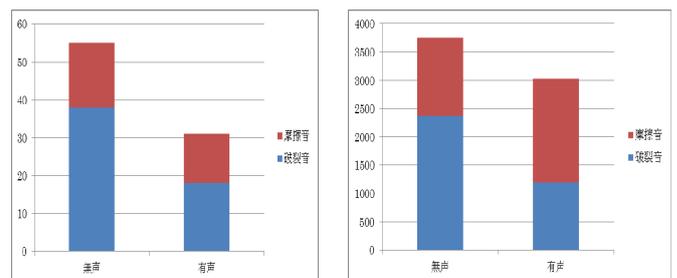


図 5, 図 6: 無聲/有聲音における破裂音/摩擦音の割合 (図 5: L2, 図 6: 字幕コーパス)

次に語頭母音<sup>10</sup>についての検討を行うが、採取データでは干渉によって出現した L2 の語で語頭に母音を持つ語が少ないために、L2 については第 1 音節の母音を対象とする<sup>11</sup>。図 7 は干渉によって出現した語の第 1 音節の母音について、図 8 は字幕コーパスの頻度上位 1 万語の語頭母音について、それぞれ「口の開き」の分布を示したものである。

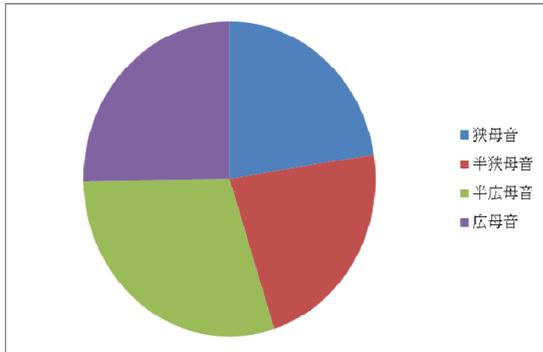


図 7: 第 1 音節母音の口の開き (L2)

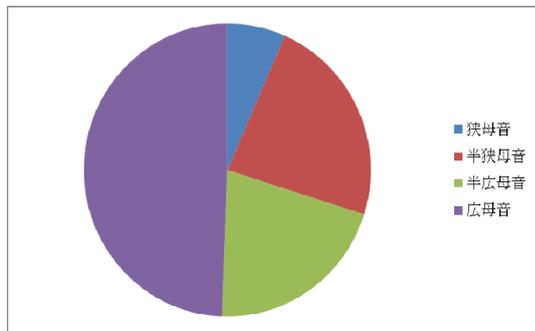


図 8: 語頭母音の口の開き (字幕 Corpus 頻度上位 1 万語)

ここで特徴的なのは、L2 における母音の口の開きの分布がほぼ均衡していること、そして字幕コーパスの方は、開口度が大きくなるにつれてその割合が大きくなっていることである。

また、次の図 9 と図 10 は、母音の「舌の位置」についての分布であり、前・中舌音と後舌音の分布が L2 と字幕コーパスとはかなり異なっている。

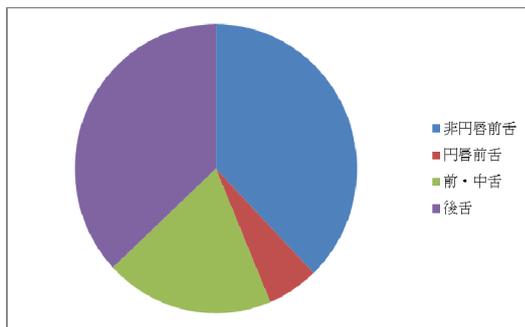


図 9: 第 1 音節母音の舌の位置 (L2)

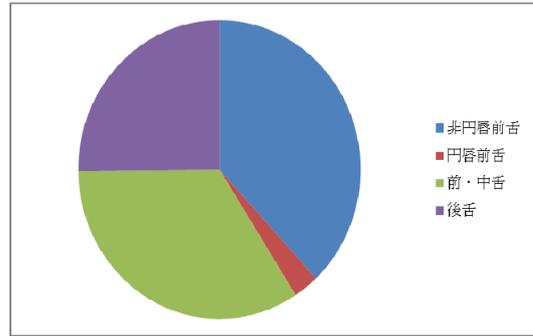


図 10: 語頭母音の舌の位置 (字幕 Corpus 頻度上位 1 万語)

干渉による L2 の第 1 音節母音と、字幕コーパスの頻度上位 1 万語の語頭母音について、「口の開き」と「舌の位置」の分布を比較した結果、それらに相違が見られた理由の仮説として挙げられるのは、現時点では母音数の相違である。コモロ語の母音数が 5 であるのに対して、フランス語の母音は、本報告で縮減した数でも 13 と多い。このことから、L1 (コモロ語) の発話内で、干渉によって使用される L2 (フランス語) の語の語頭母音が、L1 の母音システムの影響を受けている可能性はあろう。

#### 4. 今後の課題

最初に述べたように、本報告でデータを採取した 2 名の発話者のうち、ひとりについては干渉が殆ど認められなかったため、本報告は飽くまでも、暫定的な分析方法及び幾つかの仮説の提示に留めざるを得なかった。今後の課題としては、滞在期間や年齢層などが異なる、より多くの発話者データを採取すると共に、本報告で用いた分析方法の妥当性を検証することが必要となろう。取り分け、本報告で扱ったデータのように、干渉によって使用した語彙の形態素が概ね文脈に依存していることを考慮すれば、それらの語頭音の音声学的な特徴を分析することの妥当性がまず問題となろう。しかし、L1 に同義語があるにもかかわらず、L2 の語の使用を引き起こす要因のひとつとして、双方の音声システムと干渉現象との関わりを考察することは、「干渉の修辞学」への道を拓く契機となろう。

#### 付記

本報告は JSPS 科研費 23251010 (基盤研究(A)[海外学術調査])「インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究」(研究代表者:小田淳一)による研究成果の一部である。

#### 参考文献

- [デュボワ他 1980] J. デュボワ他 (伊藤晃編訳):『ラールス言語学用語辞典』, 大修館書店, 1980.
- [Lafon 1991] Michel Lafon: *Lexique Français-Comorien (Shingazidja)*, L'Harmattan, 1991.
- [B. New et alii. 2001] B. New, Pallier C., Ferrand L., Matos R.: Une base de données lexicales du français contemporain sur internet: LEXIQUE, *L'Année Psychologique*, 101, pp.447-462, 2001.
- [小田 2007] 小田淳一: 俗語の個別的修辞学, 日本認知科学会「文学と認知・コンピュータ II」研究分科会資料集, 13W-03(1-4), 2007.
- [小田他 2015] 小田淳一, 花渕馨也, Salim Hatubou, Abdou Bacar Saïd:『コモロ諸島の民話 I ーンガジジャ島方言民話』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2015.

<sup>10</sup> フランス語の母音システムには、口の開きや舌の位置の細分化によっては最大で 17 種の母音が存在するが、ここでは記述を複雑にすることを避けるために、曖昧母音などを除く 13 種に縮約した。  
<sup>11</sup> 分析対象の等質性という観点から見ればこの選択には問題があるものの、飽くまでも「最初の」母音の使用に関わる大まかな傾向を掴むための弥縫策である。